

獄中感有り (西郷南洲)

朝に恩遇を蒙り夕に焚坑せらる

人生の浮沈晦明に似たり

縦い光を回らさざるも葵は日に向う

若し運開く無きも意は誠を推す

洛陽の知己皆鬼と為り

南嶼の俘囚独り生を窃む

生死何ぞ疑わん天の付与なるを

願くは魂魄を留めて皇城を護らん

朝蒙恩遇夕焚坑 人世浮沈似晦明

縦不回光葵向日 若無開運意推誠

洛陽知己皆爲鬼 南嶼俘囚獨竊生

生死何疑天附與 願留魂魄護皇城

解説 文久二年、久光の命を待たず上落したため久光の激怒にあい、沖永良部島に流された時の作。

語釈 ※朝夕||あさとばん。 ※恩遇||厚遇・優遇に同じ。 ※焚坑||酷い仕打ちに遇うこと。 ※浮沈||水に浮き沈みする。 転じて栄枯盛衰。 ※晦明||夜と昼。 ※葵向日||臣下の主君に対する忠誠心にとえる。 ※洛陽||京都をさす。 ※知己||自分の理解者。 ※鬼||故人・死者。 ※南嶼||南の海の大島に流されたこと。 ※俘囚||とらわれ人。 ※窃生||生き長らえる。 ※付与||あたえ授ける。 ※魂魄||靈魂、人の精神。 ※皇城||宮城・天子の御所。

通釈 一介の卑賤の身から国事にあずかる寵遇を得るかと思えば、焚殺坑死の災難に会うこともある。これは何も、海の彼方の国の例に限ったことではない。栄枯盛衰のままならないのが人の世である。短い一日の内でも、暗い夜もあれば明るい昼もある。まして長い一生となれば、哀楽善悲、さまざまなことが出来(ひまわり)るものである。向日(ひまわり)は曇った日、太陽が輝かない時でも、常に太陽の方向に花開いている。運命が開くとなく、この南の島で一生を終わることがあっても、私は忠誠の心を抱き続けるであろう。修羅の京都にあつて、共に国事に奔走した同志の多くは難に殉じ、私一人、いたずらに囚われの身となって生き恥をさらしている。人間の生き死には天が与えるもので、考えても斐(か)い無(な)いことだが、死んだからとて、わが魂魄をこの世に留め皇室を守護したいと、今も心に誓っている。